
男装の騎士と女装の王子さま

手恋るか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男装の騎士と女装の王子さま

【Nコード】

N1529V

【作者名】

手恋るか

【あらすじ】

女装を強いられ、敵国の皇子との政略結婚を迫られるフィン王子。男装の騎士キアランは、大恩に報いるため決断を迫られる。愛すべき祖国と大恩ある大切な人、キアランの選択の行方は。見方によっては百合っぽく見えたり、BLっぽく見えます。でも、それっぽく見えるだけで、基本的にはフィン王子と女性騎士キアランの物語です。

プロローグ：雪原の出会い

私には、祖国を敵にまわしても護りたい大切な御方が居る。私はあの方の剣ツノキになりたくて、私はあの方の盾になりたくて、王国の騎士になったのだ。だから、もう迷わない。例え全てを敵にまわしても、私だけはある方を　フィン王子を信じる。路傍の石の様にこの身が朽ち果てても、殿下を護ってみせる。殿下から賜たまわった、キアラン・カーターの名に懸かけて。

*

私と殿下の出会いは八年前まで遡さかのぼる。雪がこの身を裂くような、忘れもしない冬の一頁。殿下の温かい言の葉に救われた、私の大切な一頁。

私は父の顔を知らず、父の指先の温かさを知らない。

私は母の顔を知らず、母の言葉の温もりを知らない。

私はこの世界で、雪と魔女の国フィン・エスターのスラムに生まれた。物心ついた時にはスラムで剣を研ぎ、自らの剣を頼りに生き延びた。ひび割れた壁の先から城を見つめ、スラムの仲間達と用心棒をして日銭を稼ぐ毎日。スラムのヤバい店、裏の世界の魔法取り引き、聞きかじりの宝石魔術と剣術でくぐり抜けた数多の修羅場。くすんだ銀髪を束ね、大人を騙して戦う日々。私の目は次第に鋭くなり、虚ろな蒼い目は心の泉が涸れ果て、涙は十歳の時を最後に流していない。最後に泣いたのは、共に生き延びた仲間の最期を看取った時だった。

私の喉元には絶えず死の匂いがまとわりつき、空腹は心柱を溶かし、理性は衝動と云う名の誘惑に膝をついた。私は言い様のない想いを抑えきれず、怨嗟えんさに満ちた慟哭くうの涙を流し続けた、延々と、延々と。でも、涙は何の安寧も私にもたらしてはくれなかった。涙で

頬を濡らしても身体は痩せ細り、青白い四肢では毛細血管が存在を主張し続けた、淡々と、淡々と。

魔物を狩り、魔物の毛皮を身にまとい、魔物の肉を食らう日々。魔物の匂いは衝動的に私を高揚させ、仲間の形見の短剣は獣の牙の様に朱にまみれた。夜の城下町を照らす魔法の街灯は、痩せ細り腰まで銀髪の伸びた私を窓に映し続けた。切れ長の目は狼を彷彿とさせるほど鋭さを増し、口元は魔物の朱に染まっていた。石畳の夜道は私の身から体温を奪い、見上げた先の窓の灯りや人々の声は私を獣へと近づけた、無慈悲に、無感覚に。

寶石魔術で身体を温め、寒さは魔物の毛皮でしのいだ。心の隙間の様にひび割れたスラムの小屋が、私のささやかな居場所だった。気休めの風よけまじない、石造りの天井の穴から射し込む月の光り、仲間と語り明かした未来への展望。新天地へ旅立った者、天に召された者、兵士として戦場へ行った者。彼らとの思い出が、私の微かな支えになっていたのだろう。来る日も来る日も、一人の夜は明けていった。明けない夜がないのが私の救いになっていた。そう、ただ一つの救いに。

*

十一歳の冬、私はフィン・エスター城を目指してスラムを出た。空を見上げると、悠久の時の流れを刻む城は金色の浮遊リングをまとい、悠然と空に浮かんでいた。降りしきる雪は金色の輪を一層綺麗に映し、古代文字とおぼしき輪の様子は雪が触れる度、淡い輝きを煌々《こうこう》と放っていた。私達が想い焦がれてやまない場所、天に浮かぶ白亜の城。

フィン・エスターの冬は私の身体から命の灯火を削り、希望と云う名のランプに風雨を浴びせた。ささくれた指先は魔物の鮮血に染まり、私の短剣は透き通る様な雪を朱色に染めた。唾棄すべき執念だとしても、私は生への未練を捨てられなかったのだろう。この広

大な世界を見たい、白亜の城に近づきたい、それが私の希望と云う名の楔くさびだった。

歩けども歩けども、フィン・エスター城は遙はるか視線の彼方かなた。水晶の丘に歩を進めても、白亜の城への魔術エレベーターはついぞ見つからなかった。水晶の丘の黒水晶黒クリオンは微かに魔力を帯びており、ほのかに茶色く濁った色合いは、私の死期を暗示しているようだった。かすむ目元、雪に埋もれる四肢、そして薄れゆく意識。全てに絶望して死を受け入れようとしたやさき、

「ねえ、お姉ちゃん。寒いのか？」

その声は唐突に掛けられた。

「寒い……心が寒くて仕方がないんだ」

衝動的に吐露とろした弱音。天に召されし仲間の分まで強く生きると誓ったはずなのに、言い様のない想いはとめどなく溢れていた。

「なら、ボクが温めてあげるよ。ねっ？ それなら寒くないでしょ」私を見つめる穏和な目元は、温かい想いに溢れていた。目元を覆う雪は生への希望にとけ、涙の様に頬を熱くしていた。私は獣として生き、獣として生にしがみついていた。でも、殿下の温かい言の葉で、私は初めて人になれたのだ。

これは遠い記憶の彼方の一頁。

これが私と殿下の初めの一頁。

1章 1：偽りの王女

私の想いは名を持たない。否、名を持つてはならない、頭をもたげてはならない。私の想いは殿下を不幸にするだけ、私の想いは騎士としてあるまじきもの。そう、主君に恋慕れんぼの情を抱くなど。

*

初春のフィン・エスター城は暖かな陽射しに彩られ、城下町の上空を悠然と旋回していく。天空の風は一向に寒さを失わず、金色の浮遊リングには微かに雪が降り積もっている。透き通る様な雪をほのかに輝かせ、静かに駆動音を鳴らす黄金の輪。この八年、騎士としての誇りを胸に刻み、心に刻んできた風光明媚ふうこうめいびな空色の景色。

部屋の中央に設置された華美な装飾の施された純白のベッド、部屋の四方に設置されている雪の女神様をあしらった像、そしてエスター城下町を一望できる身の丈以上ある巨大な正面窓。微かに冷気を帯びた上空の風は、私の銀色の前髪をたなびかせ、心なしか頬がこそばゆい。そんな私に似つかわしくない白亜の城の一郭で、私は物思いにふけっていた。

「ねえ、キアラン。もしもーし、ねえねえ。キアラン！」

私の耳元に響きわたる、微かに艶を帯びた美しい声色。そう、この声は。

「はっ！ 殿下、敵襲でありますか!？」

「ちよつと、しっかりしてよキアラン」

眼前の殿下の言葉にハツとなる。どうやら私は、またまた失礼千萬な態度をとってしまったらしい。

「殿下、申し訳のう存じます！ 私は救いようのない粗忽者そこつでありませす。斯かくなる上は、この場でこの身を！」

胸元の脈動が早まって思考が全然まとまらない。私は殿下の御心

を傷つけてしまったのだ。

「お願いやめて！ 切腹なんてしないでいいから。考えごとに夢中になるのは、誰にだってあることだよ。ボクは気にしてないから、ねっ？」

殿下は透き通る様な青い目を瞬かせ、私の手のひらに温もりを与えてくれた。笑顔に彩られたまつ毛の長い穏和な目元、透き通る様に白い雪の様な肌、雪原に咲く花の様に鮮やかな口元。殿下の笑顔はいつもと変わらず温かい、殿下の黄金の髪はいつもと変わらず美しい。でも、殿下の笑顔は三流騎士の私にはまぶしすぎる。

「殿下は、相も変わらず私の太陽であります」

口元から、思わず本音がこぼれおちる。

「えっ？ ちよっと、真顔で恥ずかしいセリフ言わないでよ。それにボクが太陽なら、キアランはお月様だよ」

「私の様な三流騎士が月とは、もったいのうお言葉でございます」
私は取り立てて剣術が得意なわけでもなく、かといって知性派でもない。強いて云うなら、腰まで伸びた艶めいた銀髪や鋭い眼光は、黒衣の下級騎士団服に似合うと評される。だが、騎士としての結果が伴わない以上、つまるところ張り子の虎だろう。

「お世辞じゃないよ。キアランは優しいから、剣術の練習の時も無意識に手加減してるんだよ。それに、ボクと初めて会った時、雪原の主の毛皮を身にまとっていたでしょ。あれは並の大人じゃ手も足もでないのに」

「買いかぶりでございます。私は、そんなに強い騎士ではありませんん」

そう、私は衝動的に獣になることを恐れている、ただの臆病者なの。に。

「ふふっ、昔とつた杵柄きねがって云うでしょ？ 大丈夫、今でもキアランは強いよ。だから、ボクの専属騎士にしたんだ。そう、キアランは暗い夜道の道しるべになるお月様なんだよ」

殿下は装飾の施されたベッドに腰掛け、力強く雄弁に語る。でも

私は。

「殿下、この騎士服は見かけ倒しで、私は正式には騎士見習いでございませぬ。仕事も侍女とさして変わりありません」

私は正式には騎士見習いで、仕事は侍女と何ら変わらない。この私、キアラン・カーターは、フィン・エル・エスター“王女”専属の侍女に過ぎないのだ。

「もー、キアランまでお姫様扱いしないでよ。キアランは侍女じゃなくて、ボクの騎士だよ。第四王子とはいえ、ボクは王子なんだ。だから、専属の騎士がいらないとね」

「しかし、殿下の御身は……」

「心配無用さキアラン。いつか、お父様にこの魔法を解いてもらい、ボクは再び成長するんだ」

肩まで伸びた金色の髪をたなびかせ、殿下は穏やかな笑みを浮かべる。でも、その表情は微かに愁いの色を帯びており、私の心のキヤンバスは急速に暖色の色彩が掠れていった。

フィン・エスター王国の王族には、古くから然る悪しき風習がある。それは双子の男児を嫡子と認めず闇から闇に葬ると云う、口に出すのもはばかられる習わしだ。

フィン王子は第三王子トーマス様の双子の弟君、オールド運命は殿下の喉元に試練の刃を突きつけたのだらう。生まれながらに隠匿の身の上となり、第一王女として育てられた殿下。時の呪術で男性としての成長を二年前にとめられ、十四歳の生誕祭を最後に容姿に変化は見受けられない。

「ねえ、キアラン。今日の暦を訊いていい？」

殿下は華美な装飾の施された空色のドレスを揺らし、口元に笑みを浮かべつつ私に暦を問う。

「金剛の暁でございます。それが……」

私は暦を思い起こしハツとなる。一瞥した先の暦石は淡々と暦を示す、円形の黒い石が示すのは金剛の暁《四月の上旬》だった。

「そう、来月はボクの十七回目の生誕祭なんだ。だから、今回はキ

「アランにも式典に出席してほしいんだ」

「私が殿下の生誕祭に出席!？」

殿下は私の非礼を意に介すことなく、私の手を力強く握りしめた。互いの手袋ごしに伝わる手の温もりは、私の心の泉に微かな波紋を拡げていく。私より一回り近く小柄な殿下の手、純白の手袋に包まれたしなやかな指先、そして私を救ってくれた優しい手のひら。人間の温かさと心を与えてくれた、私の大切な人。

願わくは 叶うことなら、私は殿下の生誕祭に出席したい。だが、雪の女神様はそれをお許しになるだろうか？

そんな言い様のない想いを代弁するかの様に、魔術水晶製の砂時計は淡々と砂を落としていく。その様子を飽きることなく見つめる私に、女神像は心なしに微笑みかけている様に映った。そう、肅々と、肅々と。

1章 2：双子の月

十年前に流行り病でセリーヌ王妃がご逝去せいきよされてから、国王陛下は床に伏せりがちになり、この国の実権は後添いであるヴェロニカ王妃のものになった。時を同じくして、スラムや格差が急速に拡がっていき、議会制民主主義制度を求めた若き法律家達は、雪の大監獄ノリス・ノアに投獄されてしまう。市井しせいの人に強いる重税、隣国との度重なる領土争い、そして地方領主達の反乱。この国は岐路に立っていると云っても過言ではない。

*

殿下の寝室に程近い見張り塔からは、フィン・エスター王国を照らす“双子”の月がよく見える。黄水晶シトリンの様に煌々と輝く山吹色の月レイバン、紅水晶ローズクォーツの様に繊細で情熱的な桜色の月メサイア。双子の月は相容れない存在で、周期的にも同時に視認できるのはまれだ。「相容れない双子の月か……まるで、殿下とトーマス様みたいだな」口元から、悔恨かいこんと自嘲じちようをない交ぜにした想いがこぼれ落ちる。センチメンタルな心情とは違う、荒々しい感情が入り雑じった想いが、私の胸を焦がしていく。

私はこの八年、殿下の成長を傍らで見守ってきた。だからこそ、国王陛下にヴェロニカ王妃が進言した内容に、深い憤りを覚えるのだろう。殿下の気持ちをないがしろにし、時の呪術を執行するように進言した張本人こそ、何を隠そうヴェロニカ王妃だ。

私は、陛下や王妃が殿下に呪術を施すのを止められなかった。私はやはり臆病者なのだろう。だから、自身のふがいなさは筆舌に尽くしがたいものがある。そう、殿下はこんな私を信じて微笑み掛けてくれたのに。

「はあ」

口元からこぼれ落ちるため息。夜の闇は心を呑み込み、憂慮の刃は鋭さを増すばかり。そう、正に青息吐息だ。

石造りの床は夜風でひんやりしており、漆黒の手袋ごしでも寒さはこの身を裂いていく。

私が横になっっている見張り塔の一室には古ぼけた鏡があり、その鏡は私の姿を淡々と映していた。微かに乱れた腰まで伸びている銀髪、肩先の白を基調としたエンブレムが特徴的な黒衣の騎士服、そして面妖に光り輝く朱色の眼。私の眼はかつて魔物の肉を食した呪いで、夜の暗幕が辺りを覆うころ蒼から朱に染まる。呪いはそれだけにとどまらず、私の肉体をさながら魔物の様に強靱なものにした。青白い脚は鉾石をやすやすと砕き、真新しい剣は私の腕力に耐えきれず砕けちり、その度に私は自身の異端さを思い知る。そう、力を抑えなければ私の心はいともたやすく獣になってしまうのだ。

「剣もろくに持てない三流騎士か……」

私の強さはあくまで獣としての強さで、騎士としての、人間としての強さではないんだ。

私は騎士としての剣の強さが欲しい。

私は殿下を護るための勇気が欲しい。

そう、私は殿下を。

言い様のない想いに冷えきった体を支配され、私はおもむろに立ち上がった。手に取ったのは古びた木棚の上の黒いボトル、紙のラベルは剥がれかけ中の酒はあと僅かだ。私は双子の月を一瞥して、一気に中の酒を飲み干した。次の瞬間、口にひろがる苦味と微かな甘味。安物の酒だが一時の心の安寧は得られる、繰り返す自分にそう言い聞かせ、口元の酒を静かに拭いた。

微かなアルコールは体を駆け巡り、私の頬を瞬く間に朱色に染めていく。ほのかに火照った体には、石造りの壁がひんやりして気持ちいい。

私の胸を焦がすこの想いは敬意？

私の胸を焦がすこの想いは愛情？

わからない、ワカラナイ。ただただ、緩慢な眠気が頭を支配していた。

「あんまり酒に逃げると、後からツケがまわってくるぞ」

つかの間の安息を得ようとしたやさき、頭上から低く艶めいた声が響いてきた。

「何の用だルースレイン？ 私はすでに成人の儀を終えた。だから、どれだけ飲もうと私の勝手だ」

「そういう問題じゃねえだろ……お前は早死にしたいのか？」

「さあな……」

ルースレインは古びた木の椅子に腰掛け、眉をひそめつつ私に苦言を呈した。雨の様に透き通る水色の癖っ毛、白を基調とした騎士服に胸元の金色のエンブレム、そして切れ長で大きい目が特徴的な端正な顔立ち。“トーマス王子の騎士ルースレイン”は、相も変わらず優男だ。

「単刀直入に話せルースレイン、こんな夜更けに何の用だ？」

私は胸元のボタンをかけ直し、黒を基調としたコートを羽織ってルースレインに問う。

「おいおい、そんなに突つかかるなよ。俺はトーマス様の命めいで来たんだぜ」

ルースレインは耳までかかる髪を夜風でたなびかせ、飽きれ顔で私の肩を軽く叩いた。相も変わらず馴れ馴れしい優男だが、その声は不思議と耳に残り、私の焦燥感をさながら雨の恩恵の様に静めていく。

「トーマス様に何かあったのか!？」

「いや、大変なことになったのはフィン“王女”の方だ。とりあえず場所を変えよう。誰かに聞かれたら、争いの火種になりかねない内容なんだ」

「分かった……」

私はにべもない相づちを打ち、木棚の上から装飾の施された白い

鞘の剣を取り、おもむろに席を立った。だがその実、私の心は言い様のない焦燥感が頭をもたげており、手元の剣は虚勢を示すように小刻みに震えていた。

1章 3：レインルウ

私は十九歳。一年前に成人の儀を終え、殿下の御心おこころを護ると誓ったのに、私の心の泉には未だに霧きりが立ち込め行き先は見えない。そう、酒で熱くなったこの身体からだの様に。

フィン・エスター城は四方に見張り塔があり、私が寢室代わりに使っているのは北の塔だ。私達は塔の階段を足早に降りていく。石造りの階段は微かに冷気を帯びており、使い古した黒いブーツごしでもほのかな冷たさを感じる。それでも私は足早に歩を進める、あの日誓った約束のために。

端正な顔立ちを月明かりで照らし、私の気をまぎらわすため、ルスレインはとりとめのない話をする。屋敷のメイドがルスレインの皿を割ってしまった話、屋敷の執事がルスレインの生誕祭の日を間違えた話、そして屋敷の宝物庫で阿修羅あしゅらの国の黒刀を見つけた話。正直、最後の話以外はおしなべて興味が無い。だが、ルスレインの語り口は軽妙で、身振り手振りみぶりてぶりとダンスを交えるため、柄がらにもなくクスツと笑ってしまった。

「なあ、キアラン。その時、俺は何て言ったと思う？ 答えは、今日は俺じゃなくて弟の誕生日だぜ、だ。そう、爺おじや俺の誕生日と弟の誕生日を間違えたんだ。そそっかしい話だろ？」

私のツッコミを待っているのか、ルスレインは尚も雄弁に語り続ける。

「儀式の間に着いたぞ。おい、聞いているのかルスレイン？」

私は城の中央の地下に位置する儀式の間を一瞥いちぺつし、おもむろにルスレインに話しかけた。だが、降りしきる雨音のせいで声が聞こえにくいようだ。

「おう、もう着いたのか。何か話が弾んであつという間だったな」

「私は相づちを打っていただけだ……」

「何だよ、素っ気ないなあキアランは」

私にはべもない相づちを打ちつつ、儀式の間につながる鉄製の扉を静かに開けた。

儀式の間は、あの悪夢の日と同じように重苦しい雰囲気に包まれている。城の中心部の地下深くに位置する儀式の間。ヴェロニカ王妃が、故郷のジャスミン・リリスの魔術を用いて造った禍々《まがまが》しい部屋。そして殿下に呪術を施し成長をとめた忌むべき場所。石造りの部屋は微かに冷気を帯びており、心を裂く様な寒さは苦々しい記憶を去来させる。動揺をルースレインに気取られないように、私は足早に部屋の中心に歩を進めていく。そう、足下の魔法陣から眼をそらし、心に降りしきる雨に目をつむって。

「約束の時間に、五分三十七秒遅刻していますよ。まったく、貴方は時間にルーズでいけませんね」

「いちいち細かいんだよ、レーンルウ！」

「貴方やキアランがいい加減なだけですよ」

レーンルウ・ポレットは、白を基調とした騎士服の胸元から、使い古した懐中時計を取り出し一瞥すると、低く綺麗な声色で私達に苦言を呈した。星の様にまばゆい山吹色の髪を後ろで束ね、レーンルウは切れ長でまつ毛の長い目を細める。レーンルウは長身瘦ちようしんそ躯うくの美丈夫で、相も変わらず神経質な青年だ。

「時は金なり　無駄話は時間への冒流ぼうりゅうです。ルースレイン、本題に入ってください」

レーンルウは再び懐中時計を取り出し、おもむろに時間を確認した。

「はいはい。“第一王子”の騎士様は、相も変わらずお忙しいですね」

ルースレインはポケットに手を入れ、レーンルウに物申す。

「おい、ルースレイン。場の雰囲気が悪くなるようなことを言うな」
そう、これは殿下に関わる話なのだから。

人生には、往々《おうおう》にして重大な決断を迫られる時がある。豪雨の降りしきる中、歩を進めるか否か。太陽の照りつける中、歩を進めるか否か。私の言の葉は雨の様に大地をうるおすことはない。私の微笑みは太陽の様に大地に恵みを与えることはない。でも、私は月になりたい。そう、太陽の下でだけ輝ける月でありたい。

「え……？」

思考の外から突き刺さる言葉は鋭く、私の心の盾を強固なものにする。私は、今しがたルースレインが言った言葉を受け入れられなかった。

「今、言った通りだキアラン。ジャスミン・リリス帝国の第六皇子メリル・メル・ジャスミンと、フィン“王子”の御婚約が成立したんだ」

「第六皇子と御結婚だと！？ そんなことしたら殿下の秘密が……」
私は予想外の事態に気が動転し、ルースレインの胸元を掴んだ手がガタガタと震え始めた。

「キアラン、皆まで言わせないでください。メリル皇子はそれを承知の上で、フィン王子を“妃”にしたいと仰っているのです。女性同士の恋愛然り、男性同士の恋愛然り。世の中には多種多様な価値観があるのですよ」

レールルウは懐中時計を見つめながら、私に淡々と持論を語った。でも、私は納得できない。殿下の気持ちをないがしろにした御婚約など、あの時と同じ承服しかねる蛮行だ。

「キアラン、ヴェロニカ王妃を失脚させて御婚約を破棄させよう」
ルースレインは水色の髪をたなびかせ、私に覚悟を決める様に促す。でも、私の力では殿下を。

「行動するならお二人だけでしてください。それに忠告しておきませんが、一歩間違えば取り返しのつかない事態になりますよ」

「レールルウの言うことなんか気にするな。キアラン、お前は どうしたい？ 大切なのはお前とフィン王子の気持ちなんだ！」

「私は……」

私は、ルースレインの問いに言葉に詰まってしまっ。ここで決断しないと取り返しがつかないのは解っている。でも、もし戦争になったら飢えた国民はどうなる？

私の脳裡に去来するのは、スラムでの生活と殿下の微笑み。

選ぶべきは我が祖国か。

選ぶべきは大切な人か。

雨が降りしきる中、決断の時は静かに迫っていた。

1章 4：城下町

私は笑顔の仮面がほしい。

大切な人を哀しませないように。

大切な人の涙にならないように。

歩く音がコツコツと響く石畳の道、木漏れ日が頬をくすぐる感触、悠久の時の旅人みたいな城下町。昼下がりのフィン・エスター城下町は、まばゆい程の人々の活気に満ちている。ガタガタつと馬車で駆ける初老の貴族、めんどくさそうに店番をしている武器屋のソフィア、そして私の隣にいる大切な人。

「わぁ 前に訪れた時よりも活気に満ちているね。キアランもそう思うでしょ？」

「はい、殿下。城下町は今日も平穩無事に正午を迎えております」
そう、雪模様の装飾が施された白亜の時計台は穩やかに秒針を刻み、青い宝石の目が特徴的な雪の女神像は広場を彩っている。町の中心部を流れる川のせせらぎも、城下町と城をつなぐ黄金の塔もいつも通りだ。

「あーもう、そんな口調で喋ったらダメだよ。ボク達は、お忍びで来てるんだからさ」

「あつ、申し訳ありません」

殿下はくるつと一回りして、私の頬を軽く突つついた。暖かな陽射しに彩られた金色の髪、笑顔の似合う明るい色合いの口元、そしてお忍びよりの白を基調とした質素なドレス。いつもと違う雰囲気
の殿下、でも笑顔の温かさは変わらない。

「ねえ、この前キアランが話してくれたパン屋って、この表通りにあるの？」

殿下はいたずらっ子のような明るい笑みを浮かべ、ゆっくりと私にそう訊ねた。

「スザンナのパン屋は裏路地にあります。あの場所は無法者も多いので、殿下が訪れるにはいささか危険な場所でございます」

私は身振り手振りを交え、殿下に裏路地の危険を説明する。改造魔具の店、魔物研究施設、そして私が時たま足を運んでいる裏格闘場。どれも一様に危険な場所だ。

「でも、ボクはキアランのオススメのパンを食べてみたいな。ねえ、キアラン。これが最後のチャンスになるかもしれないんだ。だから、ボクのただ一度のわがままを叶えてほしい」

「殿下……」

先日のルースレインの言葉が、鋭い刃物の様に私の脳裡に去来した。

場を支配する沈黙は、私の心に淡い雪を降らしていく。木漏れ日に照らされた殿下の優しい目差しを直視できない。ここで逃げれば底なし沼のような深みにはまるだけなのに、私は殿下の御心に寄りそうことができない。ああ、全て夢ならばいいのに。

「一時、この噴水広場の前でお待ちください。私がパンを買いに行つてまいります」

「本当！　ありがとうキアラン」

殿下は広場の前で飛び上がり、私の手のひらを静かに握った。

荒々しいひもで縛られたように胸が痛む。私は殿下にパンしかプレゼントできないのに、私は殿下に自由をプレゼントできないのに。それでも殿下は私を責めない。私は居たたまれなくなり、足早に広場から駆け出した。そう、噴水の水音に耳をふさぎ、心の窓をきつく閉めて。

表通りの露店を横に曲がると、道は次第に蛇のように細くなり、ひび割れた屋根や崩れた壁が視界に入り始める。虚ろな目をした商人、酒臭い大男の楽しそうな笑い声、魔物の雄叫びのような声。スラムの雰囲気は私の喉元に刃のように突き刺さる。

走るたびに黒いブーツの底は擦れ、私の心も削っていく気がした。

肺に入る新鮮な空気が妙に心地よい。微かにひび割れた裏路地の石畳、鼻をくすぐる酒や魔物の肉を焼く匂い、そして心の重さとは裏腹に軽やかなリズムを奏でる足音。この場所は“八年前”より活気に満ちている。私は、獣と一人の夜を恐れる臆病者のままなのに。

「助けて……!!」

蛇のように曲がりくねった道を進んでいると、唐突に女性とおぼしき声が響いてきた。

私は黒を基調としたコートをその場に脱ぎ捨て、裏路地の奥へ急ぐ。左手に握りしめた剣が微かに震え、脳裡にスラムの仲間の最期が去来する。あの時は誰も守れなかったが、今なら目の前の人を守れる。私は呪文のようにそう反復し、心を鼓舞^{こぶ}して走り続けた。

「おいおい、嬢ちゃん。そんなに大声だすなよ。オレが悪者みてえだろ!？」

眼前に下卑^げた男の笑いが響くと同時に、私は亀裂の入った石畳の道を勢いよく蹴り、無精髭が特徴的な巨漢に飛び掛かった。

「がはっ……」

剣の鞘が男の肩に食い込むと、生々しい音が耳元を支配していく。私はすかさず巨漢に足払いを仕掛ける。鬼気迫る表情になる私、そして重心をくずしてよろけた男。私は衝動的に獣のような戦い方になり、右手で男の後頭部をつかみ巨体を地面に叩きつけた。巨漢が叩きつけられた衝撃で微かに砂ぼこりが舞い、男は痛みで巨体を揺らして転げまわる。手に残る生々しい体温と感触に、私は自己嫌悪に駆られ唇をきつく噛みしめた。

「てっ、テメエ!!」

男は錆び付いた剣を振り回し、鬼の形相で私に切りかかってくる。剣と剣がぶつかり合う音、男の大剣が亀裂の入った壁を削る音、そして男の剣が壁に食い込む音が鈍く響いた。私はそのスキを見逃さず、あいた右手の手刀で男の剣を一気に砕く。飛び散る金属の破片

は石畳を染め、男の顔を瞬く間に恐怖で染め上げた。

「ひっ……ばっ、化け物!!」

腰を抜かした男の暴言が、鋭いナイフのように心に突き刺さった。そう、私はやっぱり獣なんだ。

「その女性から奪ったものを置いて、この場から失せろ!」

自分らしくない暴言が口元からこぼれ落ちる。荒くなる語尾、剣を砕いた冷たい感触と血の熱さがない交ぜになった右手、そして眼前の少女の怯えた目。自身への言い様のない嫌悪感が喉元を支配し、口元を押さえ辛辣しんぱんな言葉をのみ込んだ。

「きつ、騎士様……危ないところを助けていただき、本当にありがとうございました」

青を基調とした綺麗なドレスをたなびかせつつ、少女は深々と一礼し、私の手を両手で握りしめた。

「私はただの見習いです。どうか頭をお上げください」

「いえ、騎士様のお陰で、わたくしは危ないところを救われたのです。どうかお名前をお聞かせくださいませ」

心なしか上品な口調の少女は、赤みがかった長い髪をたなびかせ、私に名前を問う。

「私は、キアラン・カーターと申します」

「キアラン　フィン・エスター語で“優美な黒”という意味ですよね?」

「はい　大切な人から頂いた、私の一生の宝物なんです」

名も無き少女だった私に、殿下が与えてくださった大切な名前。

そう、笑顔の仮面なんていららないんだ。

自分の本当の笑顔で向き合おう。

殿下の本当の涙を受けとめよう。

殿下と逃げずに向き合おう。ここで逃げたら、私は本当の獣になってしまう。私の想いをきちんと伝え、殿下の願いを確かめよう。そう、もし殿下が望むなら、私は今度こそ逃げずに戦おう。

コバルトブルーの空を見上げながら、微かに震える手を握りしめ、

私は心の中で繰り返しそう言い聞かせた。

1章 5：告白

「今日は本当にありがとうございました。この御恩は忘れません。何かお困りのことがございましたら、わたくし、クララ・シャーウッドがいつでも騎士様のお力になりますわ」

「そんな……大げさですよクララ嬢。私の方が恐縮してしまいます」
クララ・シャーウッドと名乗った少女は、胸元の空色のリボンをしなやかな指先で整え、蒼玉サファイアの様な美しいドレスの裾を持ち上げ、軽くひざを折り曲げながらしずしずと一礼した。年齢は私とさほど変わらないはずなのに、クララ嬢は物腰やわらかで落ち着いており、紅玉ルビーの様な情熱的な髪にも気品がある。

「では騎士様、迎えの者が現れたので、わたくしはここで失礼いたします。騎士様の大切な御方にもよしなにお伝えくださいませ」

「懇切丁寧こんせつていねいなお心遣い痛み入ります。クララ嬢」
クララ嬢は深々と一礼し、眼鏡をかけた初老の男性と共に、露店が立ち並ぶ表通りの十字路に足早に歩を進めていった。

紅榴石ガーネットのように深い色合いの夕焼けは、石畳の道をさながら宝石のように染めていく。

焼きたてのパンの温かさが伝わる左手。

先程の戦いの感触と冷気が伝わる右手。

露店商の男の声は微かな焦燥感まきに薪まきをくべ、壁に絡まったツタは私の喉元にまで絡みついてくる気がした。私は戦いを恐れているはずなのに、私は騎士のように理性的に戦うと誓ったはずなのに、私は誰よりも獣に近い戦い方をしているのだろう。

私はやりきれない想いにのみ込まれ、殿下の待つ噴水広場に向かって駆け出した。すれ違った老紳士は怪訝けげんな表情をし、町の子ども達は羨望の眼差しを私の騎士服に向けた。路傍ろぼうの石である私を救ってくれたのは、他ならぬ殿下だった。だから、私は、私は。

かつてスラムの仲間と語り明かした約束が脳裡に去来する。誰もが安寧を享受^{あんぎょう}できる国を目指そう、自分達の力で飢えた人を救おう、それが天に召されし仲間との誓いだっただ。でも今の私は、祖国を犠牲にしても殿下を護りたいと思っている。スラムの仲間を裏切るような行為だということも、これが我欲だということも理解している。でも、私は高邁^{こうまい}な理想のためには戦えない。私が護りたいのは殿下ただ一人なんだ。

私は石畳の道を走り続けた。かつての仲間には、もう顔向けできないだろう。革命に失敗すれば、私もルースレインも処刑台に送られるだろう。それでも、もう自分の心に嘘はつきたくなかった。

「殿下!!!」

「ちよ、ちよっと。キアラン!？」

私は噴水広場に戻ると同時に殿下の手を握り、取り壊し予定の暁^{あかつき}の時計台に向かって駆け出した。そう、あの場所なら殿下の御心に近づくことができるだろう。

ひび割れて動かなくなった身の丈以上ある黒い秒針、夕焼けのように淡い色合いの壁、そして屋上に飾られた雪の女神像。暁の時計台は独特の存在感を放っている。でも、今は感傷にひたっている時間はない。私は、そう心を鼓舞^{こぶ}しながら、石造りの階段を一気に駆け上がった。

「殿下、単刀直入に言います。私とルースレインが協力して、ヴェロニカ王妃を失脚させて捕縛します」

私は青い目を瞬かせる殿下を見つめながら、時計台の屋上で革命計画を粛々と語った。

「ありがとう、キアラン。でも、お義母さまの魔術は完全に人間を超越しているんだ。そう、もしお義母さまが弱かったら、すでに精霊騎士団や王宮魔術師が捕縛しているでしょ？」

殿下は、夕日に彩られた穏和な顔に切ない色を浮かべ、私の手のひらを静かに握った。

「私は殿下の御身のためなら、この命など惜しくはありません。殿下、私にヴェロニカ王妃の捕縛をご命じください。私が剣となり盾となり、殿下の御身をお守りいたします」

心の泉からとめどなく溢れる想いはとまらず、私は膝をつき、殿下の手のひらをしずしずと握り返した。

「……キアラン、そんなに自分を卑下ひげしないでほしい。それにこの婚礼の儀は、帝国との和平条約締結のまたとない機会なんだ」

「御自分を犠牲になさるのはお止めください！」

握りしめた手が動揺して震える。殿下にかける言葉が見つからない。私は何て無力な人間なんだろう。

「そんな哀しい顔をしないで、キアラン。ボクは自分を犠牲にしているなんて思つてないよ。それに男性同士とはいえメリル皇子は、ボクに愛を告白してくれたんだ。だから、ボクはメリル皇子を信じて向き合いたいんだ。ボクが婚礼の儀を拒絶していること、ヴェロニカ王妃の摂関政治のこと、そしてキアランのこと。ちゃんと話して向き合ってみるよ」

殿下は夕日に染まった空を見上げ、私に力強くそう語った。

「殿下は、やはり私の太陽です。私は力で物事を解決しようとしていました。私は殿下のために市井しせいの人を犠牲にしようとした、救いようのない愚か者なのです。でも、私は何を犠牲にしても殿下を守りたかったのです。そう、私は殿下を」

「えっ？ ちよつと、キアラン!？」

私はしずしずと立ち上がり、大きく深呼吸をして、胸元の鼓動が高鳴るのを静めていく。

「私は八年前、殿下に救われた日から、ずっと殿下をお慕い申し上げております。私は 殿下に恋慕の情を抱いております！」

「キアラン……」

胸元の鼓動は高鳴り続け、心の泉は沸騰ふっとうしながら熱を放っていく。自分の顔が朱色に染まっていくのがわかる。自分の胸が恋情に彩られていくのが伝わる。

恥ずかしい。

はずかしい。

ハズカシイ！

私は何て大それた告白を。

「好きな女性に告白されるのって、何か照れるね……」

えっ？

「殿下……？」

「前にも言ったでしょ、キアランは暗い夜道の道しるべになるお月様だって。そう、ボクはキアランの前ではかっこいい王子さまでいたいんだ。キアランがいたから、ボクは今も気丈に振る舞えるんだよ」

はにかんで頬を赤らめる殿下。私はその笑顔にただただ癒され、霧の立ち込める心は一気に晴れていった。

「ねえ、キアラン。ずっとボクのそばにいてね？」

「はい、殿下の御心のままに」

私は初めて自分を好きになれた気がする。そう、殿下の好いてくれたこの命を、初めて大切にしたいと思えたんだ。

1章 6：胸騒ぎ

心をえぐるような雷鳴が夜の城に響き、雨音は必然的に強くなる。私が幼少時代から恐れている雷雨。雨の匂いも音もいまだに好きになれない。そう、紫水晶アメシストのような色合いの空は心まで曇らせていく。あの告白から早いもので一週間。殿下に思いの丈を伝えたはずなのに、今夜は無性に嫌な胸騒ぎがする。

「キアラン、また恥ずかしいセリフを考えているのですか？」

レーンルウは、石造りの壁に寄りかかりつつ意地の悪い笑みを浮かべた。

「わっ、私がいつ恥ずかしいセリフを口にしたんだ!？」

レーンルウの指摘に瞬く間に頬が熱くなってしまう。

「おや？ 自覚症状がないのですか……。僕から見れば貴女はキザ女以外の何者でもないですよ」

レーンルウは愛用の懐中時計を布でみがきつつ、私に辛辣しんれつな言葉を投げかけた。だが、キザなセリフのオンパレードと言われても、私には身に覚えがない。

「心配せずとも、フィン“王子”と帝国の宰相との会談は成功しますよ。あの方はキアランと違って意志が強いのですから、もっと信じてあげてください」

「……レーンルウ、私のことを遠回しに批判しているのか？」

「さあ、どうでしょう?」

レーンルウは手厳しい語句を並べ立てるが、口調はどことなく穏やかだ。

殿下と帝国宰相の会談が始まったのは四時間前。私はレーンルウのように神経質ではないが、今宵こよひは無性に時間が気にかかる。

「なあ、レーンルウ。ヴェロニカ王妃が殿下に会談を提案したこと、何か裏があると思わないか？」

ヴェロニカ王妃の紫の口元が脳裡に去来し、私を言い様のない不

安に駆り立てる。

「確かに妙ですね……。念のため、ルースレインに警備を担当させるように進言しましたが、却下したのはヴェロニカ王妃です」

レーンルウは白い手袋におおわれた手を口元に当て、思案を巡らせているようだ。

「殿下……」

「キアラン、会談はもうすぐ終了します。そしたら、貴女の好きな酒も飲めますよ」

「なっ！ 人を飲んべえみたいに言っな！」

レーンルウは場を和ませるためそう言うが、私は飲んべえではない。もし誤解されているなら由々しき事態だろう。

石造りの壁や床は微かに湿っぽくなり、私達がいる南の見張り塔の窓は雨に彩られていく。雨で外の景色が映らない窓は、私の心の窓ガラスも軋ませていく。雷雨に伴い必然的に強くなる雨音が、手元の装飾が施された剣を微かに震えさせる。いつもは気に留めない魔水晶の行灯あんどんが不思議と力強く映る。ああ、この水晶のように乱反射する灯りが、殿下の心の窓まで届けばいいのに。

「そろそろ会談も終わる頃だろう。私は殿下のもとへ行くが、レーンルウはどうする？」

「僕は晩餐会ばんさんのことで、ヴェロニカ王妃と打ち合わせがあります」

「気をつけるよレーンルウ」

「お心遣い感謝します」

レーンルウは白を基調とした騎士服のエリを整えると、太陽の装飾が施された山吹色の剣を手に持ち、大広間に向かって足早に歩を進めていった。

雨音は激しさを増していき、石造りの螺旋階段らせんは所々すき間に水が溜まっている。遠くの空に鳴り響く稲光いなびかりは閃光のように眩しく、古びた窓をギシギシと不規則に軋ませる。暴風雨は城の浮遊リング

の回転を鈍らせ、雷雨に伴い吹き付ける風は必然的に城を揺らしていく。

一步、そしてまた一步。

歩を進める度に黒いブーツの底は水を吸い、ブーツと床が擦れる度に不快な音が耳元を支配していく。私は鉄の格子がはめ込まれた窓から黄金の輪を一瞥し、殿下のもとへ足早に歩を進めていく。

南の見張り塔の階段を降り、城の中央通路にさしかかった時、私はようやく異変に気がついた。

「なっ……!？」

眼前の衝撃的な光景を前に、私の驚きは音をなさず言葉にならない。

城の中央通路は火につつまれており、白銀の兜や鎧を身にまとった騎士隊は全滅していた。魔物の爪でえぐられた様に奥深くひび割れている壁、割れた窓から吹き付ける風雨で水を吸った赤の絨毯^{じゅうたん}、そして宝石魔術の使用後とおぼしき散乱した紅水晶^{ローズクォーツ}のかけら。騎士の兜は見るも無残に砕かれており、鎧は鋭い刃物で斬ったように斜めにえぐられている。どの騎士も皆一様に手練れだ。おそらく、侵入した賊はただ者ではないだろう。

「殿下!!!」

私は中央通路を駆け抜け、会談の行われていた部屋の前にたどり着く。

握りしめた剣は微かに震え、焦燥感^{じょうそう}は稲光の音と入り雑じり刃のように心に突き刺さる。私は殿下の御身と御心の無事をただただ願ひ、雪模様の金細工が施された身の丈以上ある扉を静かに開けた。

1章 7：王妃の策略

衝撃的な光景は瞬間的に視界を歪ませる。

ゆづに百人は入りそうな会議室は凄惨な色に染まっていた。双子の月をあしらった金細工が特徴的な正面窓は割られ、吹き付ける激しい暴風雨で木製の円卓はひっくり返っている。また、護衛のための精霊騎士団選りすぐりの手練れも全滅しており、赤を基調とした絨毯に刺さった剣は生々しい朱色に染まっていた。

「……」

私は言葉に詰まりつつ、雪模様の装飾が特徴的な純白の鞘から剣を抜いた。

部屋に吹き付ける激しい風雨は、私の黒を基調としたコートをたなびかせ剣先を揺らしていく。部屋の両側にかけられた絵画は朱色に染まっており、私の心の泉を一気に沸騰ふっとうさせていく。鉛をつけたように足取りが重くなる。口元に蓋をしたように呼吸が苦しくなる。喉元にまとわりつく空気はスラムの仲間の最期に酷似している。

歩を進める度に、細かく砕かれた鎧のかけらがブーツに刺さる。歩を進める度に、吹き付ける風が私の前髪をたなびかせていく。殿下。どうかご無事で。

小刻みに震える左腕を押さえ、乾いた口元をうるおすように唾をのみ込んだやさき、

「きつ、キアラン……」

「殿下!!!」

殿下は金色の髪を風雨で濡らし、私の方へ静かに歩を進めてきた。殿下の水色のリボンが特徴的な空色のドレスは朱に染まり、レースが特徴的な純白の手袋も生々しい色に染まっていた。私より一回り小柄な、殿下の哀愁に満ちた体躯。私はやりきれない想いに駆られ、殿下の御身をしずしずと抱きしめた。

「キアラン、ちょっと苦しいよ」

「あつ、申し訳なく存じます！」

私は殿下の御声にハツとなり、半歩下がってしずしずと体勢を整える。

「殿下、御前を失礼いたします。キアラン・カーター、遅ればせながら馳せ参じました。此度の惨状について、殿下のお分かりになる範囲内で、ご説明いただけましたら幸いです」

私は右手で鞘をつかんで左手に持った剣を一気に収め、殿下の御前で深々と一礼して静かにひざをついた。

「会談が始まって一時間ぐらい経った頃、黒衣の衣装を身にまとった赤毛の魔女があらわれて、笑いながらエリック宰相を短剣で刺したんだ。精霊騎士団も応戦したんだけど、赤毛の魔女はものの三時間で百人以上の騎士を倒し、その後、ボクのみぞおちに蹴りをいれて気絶させたんだ」

「護衛の騎士が三時間で全滅……」

殿下のしどろもどろで一生懸命な説明が心の奥底まで響く。

手練れが三時間で全滅。

相手はおそらく騎士隊長クラスの猛者モウだろう。だが妙な話だ。護衛の騎士を全滅させる実力があるなら、殿下に致命傷を負わせることも容易だろう。仮に相手の目的がエリック宰相だとしても、両国の小競り合いが続いてるこの時期に暗殺など、正気の人間の発想ではない。そう、この暗殺事件は確実に開戦のきっかけになるだろう。「殿下、とりあえずこの場から離れましょう」

「……キアラン」

私が小刻みに震える殿下の手を握りしめたやさき、
「急げ!!!」

唐突に精霊騎士団の増援部隊の声が響いた。

私はそつと胸を撫で下ろし、増援部隊の力強く頼もしい足音に耳を傾ける。一步、そしてまた一步と、石造りの床を駆け抜ける足音が近づいてくる。私は殿下の肩に黒を基調としたコートをかけ、おもむろに床に座った。

力強いリズムが徐々に小さくなる。私は安堵の色に染まった顔で静かに振り返った。

「やってくれたな、キアラン・カーター!!!!」

えっ？

「違う！ 落ち着いて話を聞いてくれ！」

私は唐突な出来事に動揺しつつ、身振り手振りを交えて説明していく。

「黙れ、大逆の謀反人め！ あろうことかフィン“王女”をたぶらかし大逆の片棒を担がせるなど、恥を知れキアラン・カーター!!」

肩先の金色の装飾が特徴的な白い騎士服を身にまとう小隊長は、長い顎鬚あごひげを指先で整えつつ静かに剣を構えた。

「私と殿下は無実だ。頼む信じてくれ！」

「見苦しいぞキアラン。それに誰が犯人かなどさしたる問題ではない」

「なっ、どういう意味だ!？」

「ふふっ」

私の喉元に銀色の長剣を突きつけ、小隊長は下卑た笑みを浮かべながら淡々と語り始める。

「王妃様が貴様らが犯人だと仰った。そう、ただそれだけの話だ」

「そんな馬鹿な話があるか！ 国王陛下をないがしろにするつもりか!？」

「ふん、俺達は王妃様直属の部隊だ。先の短い国王など知ったことではない」

口元までおおつ白銀の兜で罪悪感や表情を隠し、冷たい音を響かせる鎧で温もりを隠した騎士達は、私と殿下の喉元に一斉に槍や剣を突きつけた。雨に濡れた剣先の冷たさが心の奥まで突き刺さる。

雷に揺れる槍の輝きが心の泉に波紋を拡げていく。ヴェロニカ王妃の目的が仮に開戦だとしても、この策略は完全に常軌を逸している。

「おっ、お義母さま……」

泣き崩れた殿下の御身が心の器を軋ませる。私の中で何かが崩れ

ていく。

赦せない。

ゆるせない。

ユルセナイ。

「殿下の御身に剣を向けるな愚か者め！」

私は声を荒らげ、氷模様の装飾が施された槍先を勢いよくつかんだ。

指先に裂けるような痛みが走る。心の奥底が裂けるように痛む。

細かく碎けた銀色の槍先は、私の生々しい鮮血に染まっていた。激しさを増していく雨音は心の痛みを洗い流していく。指の痛みが鈍くなる。心の痛みも鈍くなる。私の喉元から、獣のようなけたたましい咆哮ほろいっがこぼれ落ちた。

「ただの威嚇いかくだ。相手は二人、こちらは三十人だぞ。臆する必要などない！」

部屋の時間を支配する時計が止まったような錯覚に陥る。私の朱色の目が憎悪の色に染まる。左右から斬りかかる騎士の後頭部をつかみ、力任せに激しく壁に打ちつけ、鬼気迫る形相で槍先を喉元に向けてきた男の肩をつかみ、石造りの壁を蹴って勢いよく地面に叩きつけた。手のひらに残る鎧の感触が裂けた指先に染みる。石造りの壁が砕けちり風雨が気絶した騎士の顔を染めていく。不思議と痛みはなかった。ただただ雨音が耳障りなだけだった。

「ひっ、無理です小隊長……我々の敵う相手ではありません。騎士隊長クラスの強さです！」

「そんな馬鹿な……あの女はただの見習い騎士だぞ！」

指先の爪でえぐるように鎧を砕き、獣のように何度も蹴り続ける。一人、二人、三人、四人。騎士は瞬く間に気絶していく。耳元を支配する雨音はいつしか騎士の悲鳴に変わっていた。それでも私の足取りは止まらない。獣でいい。騎士のように壮美な戦い方でなくてもいい。殿下の御身を守るなら何だっていい。

衝動的な憎悪が瞬く間に私の胸を焦がしていく。ヴェロニカ王妃

が憎い。殿下の優しい御心を踏みにじった王妃。殿下の夢や希望を打ち砕いた王妃。私はひび割れた槍を砕き歩を進めていく。雨音が遠い国の音のように聞こえる。騎士の鎧を砕く度に耳障りな音が耳元を支配する。涙ながらに殴りかかる騎士のみぞおちを蹴る度、私の理性は錆び付いていく。ブーツごしに伝わる生々しい感触、獣に蹂躪されたような跡、そして気絶した二九人の騎士。

あと、一人。

私は呪文のようにそう反復して小隊長をにらみつけた。縦方向に斬りかかってきた小隊長に足払いをしかけ、転倒した瞬間に足蹴りで根本から剣を砕いた。小隊長の罵声が胸元に響く。私はヴェロニカ王妃と同じように暴力で蹂躪しているだけ。私は他にすべを知らない。小隊長の腕を踏みつけ、脚を踏みつけ、頭を踏みつけた。私の足と小隊長の身体の境界線が交わる度に、鈍い音と生々しい感触が場を支配していく。その度に激しい自己嫌悪が喉元にこみ上げてきたが、右の拳を力強く握りしめ、小隊長の悲鳴に耳をふさぎ全てをのみ込んだ。

指先の体温が生々しい。

私は小隊長の喉元に爪を立て、少しずつ締め上げていく。指先に雨が染みる。何か指先を温めていく。心が壊れていく音がする。目頭が微かに熱くなっていく。これは私の望んだ戦い方ではない。でも、振り上げた拳をおろすことができなかった。

「キアラン、もうやめて。ボクは無事だから……それ以上やったらその人死んじゃうよ。いつもの優しいキアランに戻って」

「殿下……」

私の腕を静かに握った殿下の眼差しが、心の奥底まで突き刺さった。

耳障りな稲光が鳴り響いて、風雨が私の前髪をたなびかせていく。

ああ、私は。

私には、祖国を敵にまわしても護りたい大切な御方が居る。私は

あの方の剣けんになりたくて、私はあの方の盾たてになりたくて、王国の騎士きしになったのだ。だから、もう迷わない。例え全てを敵にまわしても、私だけはある方。フィン王子を信じる。路傍ろぼうの石いしの様にこの身が朽ち果てても、殿下を護まもってみせる。殿下から賜たまわった、キアラキラ・カーターの名なに懸かけて。

1章 8：雨

風雨が心に染みる。

錆び付いた鎖で繫留ヒケイムされたように、心の奥底の泉が痛み波紋を拡げていく。風雨が心に染みる。稲光が焦燥感を駆り立てる。もう後には引けない。もう私は振り返らない。そう、あの日々を。あの平穩を。

微かに呼吸を乱すほど長い石造りの中央通路を抜け、私と殿下は城の地下に向かって足早に歩を進めていく。フィン・エスター城と地上をつなぐ塔は二箇所あり、一つは水晶の丘の最奥にある雪に彩られた白銀の塔で、もう一つは城下町にある陽射しに彩られた黄金の塔だ。だが黄金の塔は騎士団の管轄下にあるので、そこから逃げるのは得策ではないだろう。そう、はなから選択肢などなく、白銀の塔へとつながる儀式の間を指すより他にないのだ。

「殿下、先回りされないように城の上部を経由して旧階段を使用します。ここから先は風雨で危のうございます。なので、ここで一つお訊きしてもよろしいでしょうか？」

「はあはあ。なに、キアラン？」

おもむろに足を止め、肩を揺らして呼吸をととのえつつ、静かに私を見つめる殿下。

「先ほどの魔女が、まだこの城に潜伏している可能性があります。殿下の御身をお守りするため、何とぞ私に魔女の特徴をお教えてください」

私は中央通路の出口付近で追っ手が来ないか確認しながら剣を収め、殿下にせずすと一礼した。

「言葉遣いと赤い髪が綺麗な女性で、年齢は十六から十七ぐらいだと思つ。珍しい宝石を媒質にして魔法を使っていたし、嫉妬のような強い敵意を感じたから、お義母さまが懇意こんいにしている貴族の女性じゃないかな？」

「貴族とおぼしき赤髪の少女……」

「ねえ、キアラン。心当たりがあるの？」

「いえ……」

赤い髪は珍しい。

この国の人間は金色や水色の髪色が主流で、私のような銀髪や魔法のような赤髪はこの上なく珍しい。貴族の女性は伝統と気品を重んじるので、宝石魔術で髪色を変えることはないだろう。奇妙な違和感に背筋が寒くなる。喉元が息苦しくなっていく。

貴族とおぼしき少女。

珍しい髪色。

綺麗な言葉遣い。

年齢。

殿下への敵意と嫉妬。

脳裡に言い様のない疑問が去来する。私は何かを見落としている気がする。だが思い出せない。まるで“記憶に鍵”をかけられたような言い様のない感覚に、背筋が寒くなる。私は何か大事なことを忘れていている気がする。ここで思い出さなければ取り返しがつかない気がする。だが、何かが記憶に蓋をしているみたいだ。

「キアラン、顔色が真っ青だよ。どうしたの？」

「何でもございませぬ、殿下」

そう、今は眼前の出来事に集中しなくては。

城の中央通路を右折して石造りの階段を駆け上がり、私達は城の外部通路にたどり着いた。屋根もなく手入れもされていない直線の道。激しさを増す風雨は容赦なく通路に吹き付け、ひび割れた石畳には水がたまっている。もともとこの通路は浮遊リングの整備用に造られたが、先代の国王陛下が建造を承認した新通路の完成に伴い、破棄された旧時代の遺物だ。

「キアラン、気をつけて。通路の真ん中に誰かいるよ」

「えっ？」

殿下は金色の髪を雨で濡らしつつ、私の手を静かに握った。

迂闊^{うかつ}だった。

おそらく、私達がこの通路を通るのを予測して待ち伏せていたのだろう。私は豪雨で濡れた髪を紐で束ね、通路の中心に歩を進めていく。長身で体格のいい青年の輪郭が少しずつあらわになる。白を基調とした騎士服に青い鞆の剣。水色の髪が雨に濡れ目元を隠している。愁い^{うれ}を帯びた青い眼差しが私を見つめる。そう、この姿は

「ルースレイン……」

「よう、遅かったなキアラン。ははっ、待ちくたびれたぞ」

ルースレインは相も変わらず軽口をたたくが、目元は真剣で口元にも笑みが浮かんでいない。

「ルースレイン、ありがとう。お前が一緒なら心強いよ」

「いや。俺はお前と一緒にには行けない」

ルースレインは手の甲で額の雨を拭い、真剣な眼差しで淡々と語る。

「どういうことだ……?」

手のひらで汗と雨が入り雑じり、胸元の脈動が早まっていく。

息が苦しくなる。

血が冷たくなる。

「キアラン その剣で俺を刺してくれ」

思考が古びたネジのように軋みながら止まる。これは全て悪い夢、喉元に突き刺さった明晰夢だと信じたかった。だけど頬に吹き付ける風雨の感触も、身体中が融^ゆ滌^てしてしまいそうな血流の早さも、生々しいほどに現実感がある。そう、賽^{さい}は投げられたのだ。平素の安寧にすぎりついても惨めになるだけだろう。

「トーマス様が国家反逆罪の容疑でヴェロニカ王妃に拘束された。

だが、俺が死ねばトーマス様を人質にする意味はない。だから、お前の手で俺を……」

「ルースレイン……」

身体中の血が熱くなり、灼熱の猛火のようにこの身を焦がしていく。卑劣にして下劣極まりない手段だ。人の弱味に付け入り、喉元にまとわりつく案を提示して、理性を腐食させ融滌させる。ヴェロニカ王妃こそが諸悪の根源であることは明白だ。ルースレインの目で、悲痛に満ちた涙と哀愁を帯びた雨が入り雑じる。血がにじむほど手のひらを握りしめても、私の左手は小刻みに震え続ける。雨に濡れた髪がまとわりついて焦燥感を刺激していく。

「すまないキアラン……俺はお前の力になると約束したのに……でも俺は、俺はトーマス様に大恩があるんだ」

私はこの眼差しを知っている。迷い苦しみ自己嫌悪にさいなまれている者の目だ。そう、私と同じ眼差し。私と同じように心が泣いている。ルースレインに私と同じ重荷を背負わせるわけにはいかない。私は少なからずルースレインの言葉に救われたのだ。だから覚悟を決めよう。私が愚かな道化になればいい。ルースレインの主君を想う気持ちに報いるために。

「それがどうした。トーマス王子など知ったことではない」

「キアラン、正気か!？」

「ふっ、二人ともやめてよ。こんなときに」

殿下の優しい御心が私の決意を鈍らせる。だが後には引けない。

私はもう迷わない。

「そんなにトーマス王子が大切なら私を倒してみろ。ヴェロニカ王妃にそう命令されているのだろう? なら迷う必要などない。主君のために私を斬り伏せてみる!」

「本気がキアラン?」

「ああ、私はお前のように臆病者ではないからな」

私に憎悪の念を向けてくれ。私のために罪悪感などいだかないでくれルースレイン。

「キアラン!!」

ルースレインは剣を抜き怒りをあらわにする。それでいい。私を迷いなく斬ってくれればいい。だが、私もここで死ぬわけにはいか

ない。

「こい、ルースレイン・ロウ・ボールドウィン！」

まるで雪の女神様が泣いてるみたいだ。頬や髪を濡らす涙に全身が寒くなる。そんな心が痛くなる涙。私はここで死ぬかも知れない。ルースレインは優しいから私を本気で斬れないかも知れない。でも、私を本気で憎んでほしい。私達は共に主君に仕える身。本気の決闘でなければ悔恨の念は身を焼き尽くすだろう。

決闘の結果で全てを決めるなんて、殿下は野蛮な行いだと思うだろう。だが、全力で戦い負けたならばヴェロニカ王妃もルースレインを罰しないだろう。例えば私が負けてもルースレインなら殿下を守ってくれる。恨まれるのは私一人がいい。私一人でいいんだ。私は左手で剣をきつく握りしめ、延々と自分を鼓舞し続けた。

1章 9：ありがとう

雨で視界がかすむ。

剣と剣がまじわる。

心が軋んでいたい。

ああ、私は。

もう。

ルースレインは、私にとって兄のような存在だった。私は家族の温かさを知らない。私は本当の家族を知らない。だから、心の奥底でルースレインに憧れていたんだ。雨のように優しいその力強い眼差しに、雨のように心の渴きをうるおしてくれるその心遣いに。ひとたび油断すれば涙が心に突き刺さりそうで、ずっと、ずっと言えなかった。

ありがとうって。

その一言が言えなかった。私はルースレインの話が好きだったのに。私はルースレインに救われていたのに。でも、その言葉を口にしたらルースレインに甘えてしまいそうで。その言葉を口にしたら何もかも崩れてしまいそうで。それはさながら魔法の言葉のように重くて、私の喉元から出ることはついぞなかった。

ルースレインは、私のことをどう思っていたのかな？

願わくは “彼” が私を妹のように思っていてくれますように。そう、私はそれだけで救われるのだから。

「義を見てせざるは勇無きなり」ってな。臆病風に吹かれて泣いているのかキアラン？」

「これは雨だよルースレイン。それに私は嬉しくてたまらないんだ……」

目元が熱くなり涙がとめどなく溢れてくる。もう泣かないと誓ったのに。涙が止まらない。手の震えが止まらない。

「何が嬉しいんだ？」

「お前をこの手で斬り伏せられることが嬉しくてたまらないんだ。私はずっとお前に嫉妬していたんだ。第三王子の騎士であるお前に伯爵の息子であるお前に。そして温かい家族のいるお前にな！」

「キアラン……」

ルースレインに気取られないように右手をきつく握りしめて、涙にまみれた偽りの念をぶつけた。

温かい家族への渴望の念を妬^{ねた}みの念と偽ろう。騎士への尊敬の念を僻^{ひが}みの念と偽ろう。そしてルースレインへの敬愛の念を嫉^{そね}みの念と偽ろう。ルースレインへの想いも全て捨てればいい。眼前の騎士は殿下の御心を脅かす敵。平素の賊と同じように斬り伏せればいい。そう自己暗示をかけよう。そう思わなければ私は戦えない。どちらが勝っても後戻りなどできないのだから。そう、殿下の御心のためにも。トーマス王子の御身のためにも。そしてルースレインの誇りのためにも。

「キアラン、ルースレイン、お願いもうやめて！」

「止めないでください殿下、これは俺とキアランの問題なんです！」

「でも、元はといえばボクが！」

「殿下！ 後生ですから、その先の言葉は仰らないでください。私はルースレインに憎悪の念をいただいております。ずっと妬んでおりました。それが私の本心でございます！」

「きつ、キアラン……」

そう、これが殿下へのただ一度の嘘。

私達はもう後には引けないのだから。

ルースレインの眼差しが鋭くなり、その剣の柄に埋め込まれた翡^{ネフ}翠^{ライト}が淡い輝きを放ち始める。雨に彩られた翡翠は、透き通るような翠色の輝きを煌々と放つ。弱冠二十六歳で第三王子の守護騎士隊の隊長を務める、雨の騎士ルースレイン。その戦い方は優美にして苛烈と称賛されており、独壇場である雨の戦場で勝てるのは総騎士隊長ぐらいだろう。噂通りの美麗な宝石魔術に目を奪われてしまう。通路の四方に拡がっていく透き通るような水の階段。その階段をの

ぼった先には水で出来た闘技場が形成されており、ルースレインは白を基調とした丈の長いコートを脱ぎ捨てて、足早に階段を駆け上がっていく。

水の階段を駆け上がりつつ、私はルースレインと激しく剣を交差させる。

剣と剣の奏でる金属音が辺りを支配していく。

右斜めに斬り上げてても体さばきでかわされ、私が腕力でいくらか勝っていても、体重差のせいでつばぜり合いに押し負けてしまう。

これが精霊騎士団の騎士隊長の実力。

これが精霊騎士団の剣術と宝石魔術。

ルースレインが水の床に長剣を突き刺すと、透き通るように綺麗な水の槍が四方に形成されていく。私に目掛けて飛んでくる水の槍は尽きることがない。翠の宝石を媒質にした宝石魔術は、雨を支配して水の世界を形作る優美な魔術。姿勢を低くして槍をかわしても、正面から来る槍を剣で切り落としてもきりがない。ただただ水の床に足をとられ息が乱れていくだけだ。

右下に形成された水の槍を足さばきでかわしきれず、鋭い痛みが右の肩先に走る。

雨の冷たさが肩に染みる。

肩の熱い血が心に染みる。

水の槍の勢いは尚もおとろえることなく、私の攻撃は四方に形成された水の壁にはばまれてしまう。

私は上半身をひねり渾身の力を込めて、左手から斬撃を放つが水の壁はいっこうに崩れない。まるで滝を斬ろうとしているような感触に、呼吸ばかりが乱れていく。ルースレインは優しいから、水の壁で私を拘束して戦いを終わらせるつもりなのだろう。胸元に言い様のない焦燥感が去来して、激しい稲光の音に息をのむ。豪雨と水の壁にはばまれて、ルースレインの表情をうかがい知ることができない。だが稲光に伴う影は、ルースレインの表情に愁いの色をもたらしていた。

長期戦になれば私の敗北は必至。

防戦一方では袋小路におちいるだろう。

狙うは宝石魔術の媒質となる宝石のみ。それさえ破壊すれば宝石魔術は行使できなくなる。

私は意を決して右手の鞘を前方に構え、左手の剣を後ろに構えた。一撃で決めるしかない。

我流剣術「花吹雪」。

いざという時のために独学で学んできた阿修羅の国の剣術。完全に我流で実戦で試したことはないが、この技にかけるしかない。おそらく私の剣も反動で砕け散るだろう。だが、後には引けない。もう迷わない。自分を鼓舞するように剣を握りしめ姿勢を低くする。こんなに激しい豪雨なのに、不思議と雨音が静かに聞こえる。水の槍がゆっくり見える。雨で冷えきった体が熱くなっていく。

力強く踏み出した右足に体重をかけ、渾身の力を込めて右手の鞘から突きを繰り出す。

水圧で瞬く間に砕け散る白い鞘。瞬間的に激しく振動する水の壁。私はその隙を見逃さない。力強く左足を前に踏み出し、上半身の回転を加えた左手の剣で勢いよく左斜めに斬り上げる。

水の壁は縦に割れて、前方のルースレインは再び剣を構える。

つばぜり合いの度に激しい金属音が耳元を支配していき、正面からぶつかり合う度にルースレインの眼差しが突き刺さる。一、二、三、四。縦、横、斜め、前。剣と剣が交差する音は豪雨の音をかきけし、私の心と剣に瞬く間に亀裂をいれていく。そしてルースレインが長剣を降り下ろし、私が膝をつきつつ剣で受け止めた瞬間、私の剣は亀裂部分を中心に粉々に砕け、瞬間的にルースレインの動きが鈍くなった。一瞬の出来事のはずなのに永遠のように長く感じ、雪原の雪のように脳裡が白く染まっていく。私は無意識のうちにルースレインの柄の宝石を爪で砕き、弾みで水の床に落ちたルースレインの剣を踏み砕いていた。

水の床は雨の主を失い、あるべき姿へと回帰していく。

それは涙が乾くように一瞬の出来事で。
それは雨の声のように物悲しい音色で。

「くっ……」

我に返った時には時すでに遅く。水の足場は崩れ、私とルースレインは瞬く間に空中に投げ出されていく。

脳裡に「死」と云う言葉が何度も去来して、思考が全然まとまらない。

だが恐怖で天をあおいだ瞬間、私に救いの手が差し伸べられた。

「ルースレイン！」

「キアラン、俺の手につかまれ！」

ルースレインはひび割れた石造りの塔に着地して、落下していく私の手を力強くつかんだ。

「何をしているんだルースレイン！ 私達は決闘中なんだぞ！」

「そんなこと言われなくてもわかってるよ。でも、体が勝手に動いてたんだ。お前を見捨てられないんだよ！」

「バカなこと言わずに早くこの手をはなせ、お前まで下に落ちるぞ！ それに私が死ねばトーマス様も助かるんだぞ！」

私は声を荒らげてルースレインに物申すが、ルースレインの右手の力はいつこうに緩まない。

「ははっ、やっぱりあれは演技かよ。お前は昔から堅物で嘘が下手だからな」

「最初から見抜いていたのか！？」

「半信半疑だけだな。でも、俺だって妙案があるわけでもないし、トーマス様やお前、そしてフィン王子を救う方法も思いつかないんだ。決闘中ずっと考えていたんだけど、やっぱり俺はバカだからな」

ルースレインの優しさが心に染みる。私はやっぱり愚か者だ。道化にもなりきれないなんて。

「ルースレイン、頼むこの手をはなしてくれ。お前はトーマス様の騎士だ。だから私のことよりトーマス様のことを！」

「くどいぞキアラン！ それに言われなくても男の意地にかけて、

トーマス様も、お前も、フィン王子も守ってみせるさ。だから死に急ぐな！」

「ルースレイン、それは絵空事にすぎない。私はもう誰も死なせたくないんだ。きれいごとだけじゃ皆を守れないんだよ」

気高い理想は往々にして重苦しい現実にはひざをつく。そう、無慈悲なまでに。

「そんなこと百も承知さ。キアラン、俺はポールドウィン家の養子なんだ」

「えっ……？」

「俺は、お前に羨望の眼差しで見てもらえるほど立派な人間じゃない。家の名誉のため、手にした居場所をなくさないため、そして国のため。俺はバカだから、耳心地のよい大義名分を並べ立てて、この剣で言われるがままに人を斬ってきた……」

私より一回り大きいルースレインの手が哀しみに震えている。そう、私がルースレインの言葉に癒されていた本当の理由は、とても哀しくて切なくて。

「戦場で誰かを守るため人を斬ったのなら、誰もお前を責めたりしない。ルースレイン、お前はこの国の英雄なんだ。だから、そんなそんな哀しい顔をしないでくれ！」

涙と雨が入り雑じったルースレインの目元を、私は直視できない。そう、私はこんな哀しい目で殿下を見つめていたのだから。

「哀しいのは俺じゃない。俺に斬られたやつさ。仕方がないこと、ここは戦場、相手は兵士。頭ではそう割りきっても、人を斬った夜は怖くて眠れない。臆病者だろ？ だから、お前を死なせたくない。俺はやっぱり割りきれないから、トーマス様もお前も、フィン王子も。みんな守りたいって欲張ってしまう。そのために犠牲が必要なら、俺がボロボロになる。だから、だから、この手を絶対にはなすなよキアラン！」

「ルースレイン……」

かなわないよルースレイン。殿下の想いも、私の意も汲んでくれ

るなんて。

決闘も。

情熱も。

私の負けだよルースレイン。

「ありがとう、ありがとうルースレイン……」

自然とその言葉が口からこぼれ落ちた。

私は少しだけ素直になれたのかな？

全ての人を救う方法なんて私だって思いつかない。この選択だつて、取り返しのつかない結末になるかも知れない。

でも信じたい。そして少しだけ寄り添いたい。

ルースレインの優しさに。

ルースレインの温かさに。

そう、たとえそれが束の間の安寧だとしても。

一章完。二章に続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1529v/>

男装の騎士と女装の王子さま

2011年9月25日03時11分発行